

モニタリングサイト1000

陸生鳥類調査 情報

2015年 2月号 Vol.6 No.2



Ficedula narcissina
Photo by Yasuyuki Ono

結果速報

モニタリングサイト1000 2014年度繁殖期 一般サイト結果速報 森本 元（日本野鳥の会）

全国約1,000ヶ所のモニタリングサイトのうち、森林・草原の一般サイトは約420ヶ所を占める重要な分野です。森林・草原の一般サイトでは、概ね5年に1度、陸生鳥類調査（繁殖期および越冬期）および植生概況調査（繁殖期のみに実施）を行なっています。2014年度の繁殖期は、繁殖期調査を90サイト（森林75サイト・草原15サイト）にお願いしました。そのうち、現時点でデータが集まり集計が完了している森林70サイト、草原13サイトの計83サイトのデータを用いて、中間報告いたします。

記録された鳥類

合計154種（森林125種・草原95種）の鳥類が確認されました。これは昨年よりもやや多い値でした。（昨年の森林・草原の合計は77サイト（森林63サイト、草原12サイト）で132種）。森林サイトのみを比較すると、昨年の森林サイトは111種でしたので、確認種数が増加しています。ただし確認種数は、サイト数が多いほど増加しますが同時に徐々に頭打ちになる傾向があります（詳細は本ニュースの6巻1号を参照ください）。過去の出現種数とサイト数の関係から考えますと、今年は平年並のようです。昨年は調査サイト数が例年よりもやや少なかったことも、今年の確認種数が一見、大きく増加した理由の1つといえそうです。

次に、森林における出現率、優占度の上位種を表1に示しました（出現率：ある種の出現サイト数÷調査サイト数、優占度：サイトでのある種の個体数÷総個体数を平均したもの）。まず出現率を見てみますと、第2期5年間全体（2008

表 1. 2014年度繁殖期の出現率の上位10種

a) 森林サイトの出現率 (n=70)			b) 草原サイトの優占度 (n=13)		
順位	種名	出現率	順位	種名	出現率
1	ウグイス	95.7	1	ウグイス	92.3
2	シジュウカラ	90.0	1	キジバト	92.3
3	ハシブトガラス	84.3	2	カッコー	84.6
4	ヒヨドリ	81.4	2	ハシブトガラス	84.6
5	キビタキ	78.6	5	カワラヒワ	76.9
5	コゲラ	78.6	5	ハシボソガラス	76.9
7	キジバト	75.8	7	トビ	69.2
8	ヤマガラ	70.0	7	ヒバリ	69.2
9	メジロ	67.1	7	ヒヨドリ	69.2
10	オオルリ	64.3	10	アオバト	61.5
11	ホトトギス	61.4	10	シジュウカラ	61.5
10	ヒガラ	58.6	10	ツツドリ	61.5

表 2. 2014年度繁殖期の優占度の上位10種

a) 森林サイトの優占度 (n=70)			b) 草原サイトの優占度 (n=13)		
順位	種名	平均優占度	順位	種名	平均優占度
1	ヒヨドリ	11.0	1	ヒバリ	6.9
2	ウグイス	7.1	2	ノビタキ	6.1
3	メジロ	5.8	3	カワラヒワ	5.0
4	シジュウカラ	5.7	4	ウグイス	4.6
5	ヤマガラ	4.4	5	ホオアカ	4.2
6	キビタキ	3.9	6	ホオジロ	4.0
7	ハシブトガラス	3.7	7	ハシブトガラス	3.9
8	ヒガラ	3.4	8	ムクドリ	3.8
9	コゲラ	3.3	9	カッコー	3.4
10	エナガ	2.9	10	キジバト	3.2

年度～2013年度)の上位種は、ウグイス、キジバト、キビタキ、コゲラ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ホトトギス、メジロ、ヤマガラ(五十音順)でした。年により種の順位は多少の入れ替わっていますが、上位種の構成はほぼ一致しており、これら上位種の順位は安定しています。10位前後の種は、概ね10位台と10位以内を行ったり来たりしています。たとえば、エナガ、オオルリ、カケス、カワラヒワ、ツツドリ、ヒガラなどがこれに当たります。トップ10は上位ほどその順位は安定しており、ウグイスはほとんどの年で出現率1位、シジュウカラは2位、キビタキ、コゲラ、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ヤマガラなどはずっとトップ10の上位～中位集団の一員です。こうした例年の傾向は、今年度も同様でした。ただし、ヤマガラは今年の順位を大きく落としています。これについては後述します。優占度においても、上位種の安定性は非常に高く、例年通りにヒヨドリやウグイスが最上位を占めていました。

ヤマガラの順位変動について

このニュースレターの過去号において、近年のヤマガラの動向について着目し、お伝えしてきました。それは、ヤマガラがここ数年で大きく順位を上げてきていたからです。モニタリングサイト1000がはじまってから、トップ10の後半に位置することが多かったヤマガラが、2012、2013年度と順位を大きく上げ、昨年はついに4位にまでなっていました。このままヤマガラが順位上昇するのかに着目していましたが、なんと、今年度は大きく順位を下げました(図1)。図1は、今年度の出現率最上位トップ3であるウグイス、シジュウカラ、コゲラとともにヤマガラの出現率の年変動を、第2期5年間につい



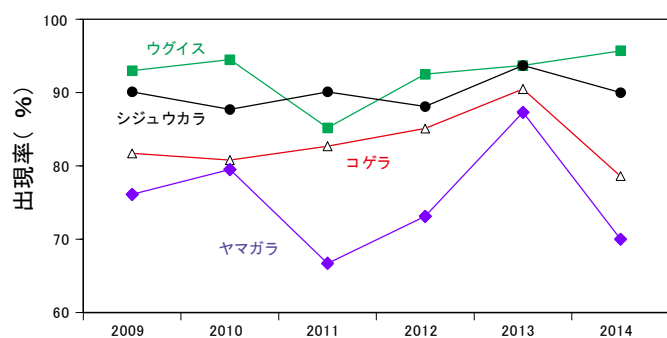


図1. 各種鳥類の出現率の順位の年変動

で示しています。このグラフから、上位3種の出現率が高い値で安定していることがよく分かります。長年1位のウグイスは、そのほとんどで90%を超える高さです。シジュウカラは90%近い値、コゲラは80-90%近い値が毎年続いています。どれも同じような値(出現率)で年変動しているのが特徴です。これに対してヤマガラはどうでしょうか。最初の80%以下の値が続いていた状態から変わって、昨年度は初めて90%近い値にまで急上昇しています。なおこのときに初めて最高順位である4位にもなりました。しかし、今年度は大きく変化して、過去5年間で最も値が低かった2011年度に次ぐ値(約70%)にまで激減しています。近年のヤマガラの増加傾向は、越冬期にも確認されていた現象でした。夏冬のこうした個体数変動を踏まえると、近年全国的にヤマガラが増加傾向だったことは確かそうです。この現象が継続し、ヤマガラが今後増えていくのか、それとも一時的なものであるのかに注視していましたが、現時点では、近年のヤマガラの増加は一時的な現象であったと考えるのがよさそうです。似たような現象として、長年2位だったシジュウカラが1位になった件があります。ウグイスが1位、シジュウカラが2位という状態が第1期からずっと続いていたのですが、両者の順位が初めて逆転したのが2011年度でした。当時はついに首位交代かと驚くとともに、その傾向が継続するかに着目していましたが、シジュウカラの首位はわずか1年で終わってしまいました(図1)。今では再び両者の関係はもとのウグイスが1位、シジュウカラが2位という定位置に戻ってしまいました。両者の順位逆転は、あくまで年変動の一部であったようです。今後数年間の変動を見てからでないとわかりませんが、今回のヤマガラも同じような状況なのかもしれません。

これには寿命が関係しているのかもしれませんが。小鳥の野外での平均寿命はわずか数年と考えられているので、ヤマガラにとって繁殖がうまくいくような年が1~数年あり、たまたま一時的に増えたものの、世代交代して元に戻ってしまった可能性もありえます。多くの生物で、種の個体数は増えたり減ったり振動していることが知られており、今回の増減もそうした振動の一部である可能性があります。

モニタリングサイト1000ならではの事情が影響しているのではという考えもできます。つまり、毎年調査地が入れ替わるゆえの変動です。調査地が入れ替われば、確認される種構成が変動しうからです。しかし、ウグイスやシジュウカラはサイトが入れ替わってもずっと同じような順位となっているので、こうした影響を考慮しても、ヤマガラの変動は他種以上に大きなものであり、サイトが入れ替わっている影響が主な原因ではないと考えられるでしょう。

現在のモニタリングサイト1000の森林草原調査は、第3期に突入しています。第1期では鳥類の調査が初めの頃は実施されておらず期間の途中から開始されたことや、調査方法が現在のポイントセンサス法でなくラインセンサス法であったことなどが理由で、現在の方法で得られているデータとは単純に比較できません。しかし、第2期と第3期であれば調査方法も調査地も同じですから、今後、経年変化を直接比較で調べることが可能になっていきます。まさにモニタリングサイト1000が目指してきた、日本の自然の経年変化を記述するというのが次の段階へ進むといえそうです。そのためにも、第2期に得られたこうした出現率や優占度がきわめて安定した傾向をもっていたという結果は、今後の日本国内の鳥類相の変化をモニタリングする際の重要な基礎だといえます。地球温暖化などの影響によって、これらがどのように変化していくのかが注目されます。

なお、本結果は中間報告であり、未集計のサイトが今後追加された際に、結果が変動する事がありますので、ご注意ください。

調査へのご協力ありがとうございました

今回の結果からもモニタリングサイト1000という長期調査を継続することの有用性の一端を感じていただけたと思います。毎年の積み重ねにより、長期継続調査の結果の重要性が増していくことを実感いただければ幸いです。この成果は、多くの方々のお力添えの結果です。単年度で見ていると分からないことでも、長期の積み重ねがあれば、様々な事が判明していきます。日本の環境変化のモニタリングのためには、多くの方々のご協力による調査の継続が欠かせません。引き続き、皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

2014年度繁殖期の一般サイト調査には、124名の皆様のご協力をいただきました。最後にお名前を記し、お礼に代えさせていただきます(敬称略、順不同)。明日香治彦、阿部旭、阿部修、阿部誠一、阿部智留恵、荒哲平、五十嵐悟、生田誠二、石川喜春、井上伸之、五百蔵聡、五百蔵由美子、植木正勝、植田潤、梅木賢俊、江島浩紀、大河原吉衛、大久保香苗、大塚之稔、大橋正明、岡本翔子、奥田孝一、小山内恵子、小山内澄恵、小山内庸博、小澤勝美、門村徳男、金井裕、金子勇策、上明戸正一、上山義之、神谷芳郎、川島賢治、川瀬浩、河地辰彦、北川捷康、久貝勝盛、久保田賢一、黒沢信道、黒沢優子、小池重人、小泉金次、香西宏明、幸徳行、小瀧賢作、小荷田行男、小林繁樹、小林富夫、駒木根和寿、近藤健一郎、近藤義孝、今野研一、齋藤誠一、齋藤文子、斎藤充、佐々木伸宏、佐々木仁、佐藤穎、佐藤公生、志賀祐悦、志摩俊樹、鈴木敏祥、鈴木洋子、清野信行、関川實、大徳尚人、高美喜男、滝沢和彦、竹中ひろみ、棚邊美根子、谷口秀樹、千嶋淳、辻秀之、出口敦司、手嶋洋子、東條秀徳、中石光彦、中井節二、長渡真弓、中野渡園子、中村茂、中村尚彦、西川猛、錦織伸治、西田好恵、西村公志、端田賢二、葉山政治、原田修、伴野正志、広塚忠夫、藤井猛、藤谷節子、星野由美子、前田幹雄、猿子正彦、増永章子、丸山健司、三浦悦子、三浦憲悦、三浦スミエ、水越文孝、三本杉松夫、宮野啓子、村井敏郎、森永太一、谷角裕之、築川堅治、山口喜盛、山口雅生、山本和紀、山本寿美子、山本勝、横田敬幸、横田嫩子、吉原努、米倉達夫、鷺田善幸、渡辺昭、渡辺貴美恵、渡辺健三、渡辺修治、渡辺文子、渡辺恵

結果速報

2014年度 コア・準コアサイト鳥類調査 繁殖期結果報告

植田陸之(バードリサーチ)

全調査地での調査が完了

2014年の繁殖期は、26サイトで調査を行ないました。今年には新たに、三之公の準コアサイトを調査することができ、これですべてのコア・準コアサイトで調査が行なわれたこととなります。そこで、これまでに得られた結果をあわせて全国の鳥類の状況についてご報告いたします。

2014年度までの記録種数をみると(表1)、多少の増減はあるものの、毎年の種数は比較的安定していました。この傾向は年変動の大きい越冬期の結果と比べて顕著です。バイオマスについても同様の傾向があり、繁殖期の森林鳥類の生息状況の安定性が今年も確認できました。

コアサイトは純森林性の鳥がより多い

次に一般サイトの結果と比較してみました。一般サイトの優占種はヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ヒガラ、ハシブトガラスと続きます。これに対して、コア・準コアでは、ヒヨドリが最優占種であることには変わりはありませんが、優占

度は一般サイトより低く、ウグイスは6位、メジロ7位、ハシブトガラスはトップ10圏外と低い傾向がありました。逆にコアサイトではヤマガラ、ヒガラ、キビタキが上位に入っていました。コアサイトでランクの低かった種は純森林性というよりは疎林にもいるような鳥たちで、逆にランクの高かった種は森林性の鳥のようです。コア・準コアサイトは、全般に山深い大径木林にあり、一般サイトは人里近い場所にも多いので、こうした傾向が出たのかもしれない。

表 2. 2009-14年のコアサイトと第2期一般サイトの優占種上位種の違い

コア・準コアサイト		一般サイト	
種名	優占度	種名	優占度
1 ヒヨドリ	8.58	ヒヨドリ	11.18
2 ヤマガラ	7.19	ウグイス	7.84
3 ヒガラ	6.25	シジュウカラ	5.99
4 シジュウカラ	6.23	メジロ	5.62
5 キビタキ	5.15	ヒガラ	4.02
6 ウグイス	5.14	ハシブトガラス	3.92
7 メジロ	5.01	ヤマガラ	3.91
8 エナガ	4.00	キビタキ	3.71
9 コゲラ	3.75	コゲラ	3.47
10 ミソサザイ	2.98	エナガ	3.08

日本の森は南の鳥が幅をきかせてる？

上位種の地理的な分布特性をみると、暖かい地域で優占度の高い種が多いことがわかりました。ヒガラは寒い地域に多い種ですが、ヒヨドリ、ヤマガラ、メジロは暖かい地域の方が優占度が高いのです(図1)。シジュウカラやエナガ、コゲラも同様の傾向があり、キビタキ、ウグイス、ミソサザイには明確な傾向はありませんでした。特に暖かい地域に調査地が多いというわけではありませんので、この結果は日本の森林は南の鳥が幅をきかせていることを示しているのでしょうか？ 今後の変化に注目していきたいと思います。

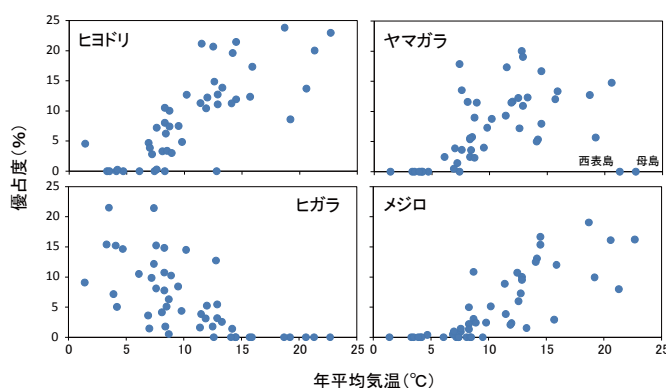


図 1. 各調査地の年平均気温と2009-14年の平均優占度との関係

調査ありがとうございました

2014年の現地調査にあたっては、以下の皆様にご協力いただきました。ありがとうございました。

安達 光, 池田泰宏, 石井一樹, 石黒佑紀, 石山義浩, 磯部功太, 今井 創, 岩本富雄, 植田陸之, 岡田 茜, 唐澤迪子, 河上智也, 川崎慎二, 金城孝則, 木暮悠太, 小柳優奈, 今野 怜, 齋藤純子, 佐藤重穂, 佐藤亜州花, 外間 聡, 高美喜男, 星 佳奈, 高塚 大, 滝沢和彦, 知花重治, 中村 豊, 成定真太郎, 沼野正博, 野口直樹, 早坂榛名, 日比野政彦, 平野敏明, 古郡啓太, 堀田昌伸, 松井理生, 松岡佑昌, 三上かつら, 柳田和美, 山内康平, 吉田宗史(敬称略)

表 1. 2009-2014年繁殖期コア/準コアサイトの確認種数

サイト名	種数					
	2009	2010	2011	2012	2013	2014
足寄	27	33	30	30	34	28
雨龍	33	27	36	32	29	25
苫小牧	26	28	24	25	29	24
カスマ沢	20	21	24	19	22	24
大佐渡	25	32	27	31	27	32
小佐渡	30	33	28	27	32	29
小川	22	24	25	26	33	30
那須高原	30	36	32	32	28	31
大山沢	27	36	29	27	30	29
秩父	33	38	28	29	31	31
カヤの平	22	23	25	29	27	27
おたの申す平	19	20	14	17	22	23
愛知赤津	23	19	22	18	22	22
芦生	25	25	20	22	17	25
上賀茂	23	22	16	21	21	23
和歌山	24	19	19	23	21	20
市ノ又	20	21	18	22	23	19
綾	22		24	23	25	25
田野	22		25	20	24	22
与那	16	17	16	17	17	16
奄美		19	18	16	17	16
大雪山					32	
野幌		31				31
大滝沢	23				24	
早池峰		22				
青葉山		26				24
金目川		35				
高原山	27				34	
筑波山	28				28	
西丹沢	24				32	
富士			30			
函南		27				
御岳濁河		22				
木曾赤沢	20				16	
三之公						24
春日山			25			
大山文珠越			23			
半田山				15		
臥龍山			23			
宮島	21					23
佐田山				16		
対馬龍良山				14		
粕屋			20			
椎葉		26				22
屋久島スギ林				15		
屋久島照葉樹林		14				
西表	15					
小笠原石門			4			

レポート

モニタリングサイト1000の調査に参加して 高塚大(酪農学園大学野生動物生態研究会)

私たち酪農学園大学野生動物生態研究会は、今年度からモニタリング1000の調査に参加することになりました。調査地は普段から私たちのサークルがフィールドとして利用している野幌森林公園です。

調査に参加するきっかけとなったのは、毎年北海道大学で開かれている北海道鳥学セミナーに参加した時に会場にいらっしゃった方からの紹介です。その後部員たちに意見を聞いた末に、モニタリング1000の調査を引き受けさせていただくことになりました。

野生動物生態研究会は30年以上続くサークルでサークル活動の一環として野幌森林公園の桂コースと四季美コースという場所でラインセンサスによる鳥類調査を行なっ

てきました。モニタリング1000の調査方法はスポットセンサス法で、普段私たちが行なっているラインセンサス法とは違っているため、初めは調査がスムーズに行なえるか心配でしたが、調査マニュアルを読んだりすることで当日の調査はスムーズに行なうことができました。また、モニタリング1000で指定されている調査地点の一部は普段の私たちの調査コース上にあったので、一緒に調査をした他の部員たちも緊張することなくリラックスして調査を行なうことができました。

最後に今回の調査や研修会などでお世話になったバードリサーチ他の方々に心より感謝するとともに、今後も交流が続くことを願っております。



オホーツク支部のとりくみ 川崎康弘(日本野鳥の会オホーツク支部)

日本野鳥の会オホーツク支部は北海道東部の網走・北見・紋別の各市と周辺地域を活動範囲にしています。会員数はここ数年240名ほどで推移しており、長期的に見ると緩やかな増加傾向が続いています。

探鳥会(管内各地で年間30回以上、男子禁制の女子探鳥会もあり!)と支部報(毎月発行)の2つを活動の柱にしており、一昨年から座学を基本とした「鳥塾」という学びの場を企画し、これをしっかり根付かせて3本目の柱にしたいと考えています。また、時代を鑑みて、独自ドメインでのホームページを2001年から運用し、近年はより管理が簡単なブログを併設し、野鳥情報などを頻繁に更新するなど、発信にも力を入れています。

このような活動から活発な支部という印象を抱かれることも多いようですが、悩みも多く抱えております。その最たるものが「実働部隊が少ない」ということです。オホーツク管内は魅力的な鳥やフィールドにあふれ、未解明のことも数多くあるため、積極的に自前の調査をやっていききたいところですが、調査できる人材がまだ少ないうえに余暇の少ない現役世代が多いため、モニ1000調査への協力で手一杯……といった状況が続いています。そのモニ1000も、中心メンバーだけでは対応しきれなくなってきたため、管内各地の会員の中から実力十



「鳥塾」の様子



日本野鳥の会オホーツク支部のホームページ

分な方を一本釣りして依頼することで活路を見いだしている状況です。

このような現状から人材育成は急務と考えており、いろいろな試みをしています。まずは「調査の楽しさ」を知って頂くことが肝心と考え、庭や近所の公園など、ごく身近な場所で観察した普通種を何でもいので報告してもらい、それを簡単な図表やリストなど「目に見える形」で整理して「あなたが観察した結果はこうですよ、こんなことがわかりましたよ」と呈示することを始めています。これは「調査」に対して「難しそう」「敷居が高そう」といった印象を抱いていた「普通の人」には大変効果的だと思います。成果を実感することで、やる気が生まれます。メモすら取らなかった人がきちんと定期的に観察し、個体数まで数え、記録をし、報告してくれるようになります。定期的に通うフィールドがあることで、調査に必要な「観察耳目」も確実に向上し、自信がついてきます。こうした人には近い将来、モニ1000をはじめとした各種の調査をお任せできるようになると確信しています。

私が言うのもおこがましいですが、支部、特に私どものような地方の支部は人を育てる大きな責任があると思います。積極的に会員を増やし、入会してくれた会員にはステップアップしていただきたい。その機会を用意し、働きかけを継続していくことが重要だと考えています。一朝一夕にはいかないことですので、今後も粘り強く続けていきたいと思っています。

事務局からのお知らせ

みんなで日本の鳥の今を描きませんか？

～全国鳥類繁殖分布調査がはじまります～

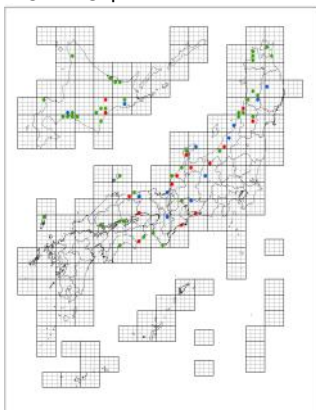
植田陸之(バードリサーチ)

鳥の分布の変化がわかった前回の調査

1970年代と1990年代に行なわれた環境省の全国鳥類繁殖分布調査。日本全国の鳥の分布図を描くために、日本野鳥の会を中心とした全国の約2,000人のバードウォッチャーの協力を得て実施された調査です。みなさんの中にも過去の調査に参加され、当時のことを覚えている方もいらっしゃると思います。

全国の分布を明らかにすることは、観察者の多い鳥だからこそできる調査でもあり、この調査の成果は、野生動物の全国的な分布とその変化をみることで数少ない情報として、現在でも日本の生物多様性の評価のために使われています。また、このニュースの以前の号(Vol.1No.2)でもご紹介していますが、モズ類やヨタカなどの若齢林に生息する鳥、そしてシロチドリやコアジサシなどの裸地に生息する鳥などが減少していることがわかり、これらの鳥がレッドリストに掲載されることにもつながりました。

1974-78年



1998-2002年

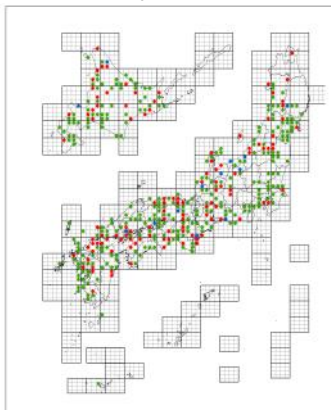


図1. アオサギの分布の変化。1970年代から分布が大きく拡大したことがわかる。赤が繁殖の確認された場所、青が繁殖の可能性の高い場所、緑が繁殖の可能性のある場所。

NGOと環境省との共同調査

すでに前回の調査から20年が経とうとしています。近年もスズメの減少、外来種の分布の拡大、藪にすむ鳥の減少など、鳥の生息状況に変化が起きており、全国の鳥の今を明らかにする必要がでてきました。しかし、緊縮財政の世の中、次の調査を実施できる予算的な目処がたっていないというのが現状です。

そこで、日本の鳥の今を描くために、皆さんの力を貸していただけないでしょうか？ 現在、日本野鳥の会、日本自然保護協会、バードリサーチ、日本鳥類標識協会と環境省、そして大学の研究者などと共同で、再び全国鳥類繁殖分

表1. 分布調査のスケジュール

	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
準備							
調査者募集							
現地調査							
アンケート							
解析							
とりまとめ							

布調査を実現するために動き出しています。すでに何人もの研究者やボランティアが参加を表明してくれていて、調査コースの入力などの調査のための準備が始まっています。来年度まではこうした準備に費やし、2016年度から2020年度にかけて現地調査を実施する予定です。

調査への参加のお願い

2,300ある調査ルートや生息状況のアンケート調査、識別ミスのチェックなど、鳥の知識がある方のご協力ももちろん必要ですが、データの入力、ホームページやニュースレターの作成といった裏方のお手伝いも必要です。鳥の調査はちょっと難しい、という方にも是非ご協力いただき、20年に1度の大イベントを成功させたいと思っています。

繁殖分布調査のホームページを公開いたしましたので、ご覧いただき、参加いただける方は参加登録をお願いします。現在は、入力の終わった調査コースの地図の画像ファイル化をお手伝いいただいています。ご登録いただいた方には進捗状況や成果等を随時お知らせしていきます。

<http://www.bird-research.jp/1/bunpu/>



図2. 対象は日本にいる鳥全て(写真:内田 博)

事務局からのお知らせ

モニタリングサイト1000

研修・交流会の報告

荒 哲平(日本野鳥の会)

モニタリングサイト1000の事業は多くの市民調査員のみなさまのご協力によって運営されています。このような大規模かつ長期的な事業を継続するには、調査員の確保とモチベーションの維持は欠かせないものです。陸生鳥類調査ではこれまで、モニタリングサイト1000の事業紹介と調査方法の共有のための研修会を全国各地で行なってきました。第3期(10年目)の2013年からは調査手法の講習のウェイトを落として、各地域で様々な調査・モニタリングをされている方の交流・情報交換の場となることを目的として、研修会を実施しています。

2014年は福島、北海道、愛知、東京の4地域で研修会を実施しました。福島では、高校生の大槻恒介さんが福島市小島の森で日頃熱心に観察しているカラ類の混群についての研究結果を発表してくださいました(写真1)。北海道では野幌森林公園で実習を行ない、公園内にある準コアサイトで実際に調査を担当されている酪農学園大学の学生さんが多く参加してくださいました(写真2)。愛知では名古屋工業大学で座学を行ない、日本野鳥の会愛知県支部の野澤徹也さんにサギ類の識別について熱く語っていただきました(写真3)。東京では、国際鳥類学会名誉会長



写真2. 野幌自然公園でのセンサス実習

も務められた中村司先生にもご参加いただき、参加者全員がフリーソフトQGISを用いた解析に挑戦しました。

今年は、大学の野鳥サークルに所属する学生さんなどの若い参加者が目立ちました。モニタリングサイト1000の研修会をきっかけに、鳥類研究者を目指す若者が増えると嬉しいですね。調査が未経験の一般の方々でも、ベテランの方の調査に同行してスキルを磨き、新たな調査員として活躍されている方もおられます。来年度以降も、調査活動そのものに関心を持っていただける方の活動がより活発になるような研修会の実施を計画しておりますので、詳細が決まり次第このニュースレターでご案内します。初心者の方の受講も歓迎いたします。みなさまとお会いできる日を楽しみにしております。



写真1. カラ類の混群について発表する大槻恒介さん



写真3. サギのデコイを使って発表する野澤徹也さん

Facebookページができました

調査状況の情報交換のためのFacebookページをつくりました。現在は、各地の越冬期の調査の状況を知ることが出来ます。Facebookのアカウントをお持ちの方はぜひご登録して、調査の様子をお知らせください。

<https://www.facebook.com/groups/548649768498672/>

モニタリングサイト1000 陸生鳥類調査情報 Vol.6 No.2

2015年2月14日発行

発行: 環境省 自然環境局 生物多様性センター

編集: 公益財団法人 日本野鳥の会

特定非営利活動法人 バードリサーチ

編集責任者: 植田睦之(バードリサーチ)

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

<http://www.wbsj.org/>

<http://www.bird-research.jp/>

表紙の写真: キビタキ